

中古中世シク活用形容詞接尾語「がまし」の意味特徴

于 艶麗

1. はじめに

形容詞は、上代語からその種類にはク活用とシク活用があり、ク活用をする語は情態的な属性概念を表すことが多く、シク活用は情意的な意味を含む傾向があると指摘されている。形容詞の情意性とその形態活用との秩序ある対応関係は、上代語において、非常に特徴ある造語形式である。

中古中世になって、形容詞語構成の特徴として現れるのは、複合と派生によって、合成形容詞が大量に産み出されたことである。その中で、シク活用形容詞接尾語は特に優れた造語能力を発揮し続けていた。本稿では、中古中世において最も典型的なシク活用形容詞接尾語「がまし」を中心に、その意味特徴と派生語を考察してみたい。

2. 接尾語「がまし」の辞書記述

接尾語「がまし」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）には次のように記されている。

動詞の連用形、体言、副詞などに付いて、その状態や物に似ている意を表す。…らしい。…のきらいがある。…の傾向がある。

*枕〔10C終〕一三三・頭の弁の御もとより「女のすこし我はと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ」

【語誌】

- (1) 和文系の文脈に限って現われ、古代から近代に至るまで造語能力を保持し続けている。一方、類義語のガハシは、和文・漢文訓読両系の文脈に現われるが、造語能力を十分に発揮せず、早く衰退する。
- (2) 中世以降、「望ましくない。不快である」といった否定的な評価の意味を示す方向へ傾いてゆくが、中古には「はれがまし」「ひとがまし」のように、肯定的な意味を表す語もあり、否定的な評価の意味に偏っているものではなかった。

次に、『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五～二〇〇〇）の「がまし」〔接尾〕の項目には次のような意味記述が見られる。

- ①いかにもそれらしい様子が、言動に反映されているさまである。
- ②形式的にはそれらしく整えられているさまである。
- ③どのような観点からしても、そうである虞れが感じられる

現代語の「いかにも…のようすだ」「…らしい」という意味に当たる接尾語である。

3. 接尾語「がまし」の出現時期

接尾語「がまし」は次のように平安中期から用例が見え始める。『日本国語大辞典』(二〇〇一)に立項された次の八語の最も古い挙例を示す。

[名詞+がまし]

○をこがまし【痴・烏譚】ばかばかしくて、笑いを誘うようなさま。ばかげている。みつともない。いい物笑いになりそうだ。

*落窪〔10C後〕一「形うちふくれて、いとをこがましと、少将つくづくとかいばみ臥したり」

○かごとがましい【託言】何かのことよせて恨みごとを言っているようだ。嘆き悲しんでいるようだ。恨みがましい。

*源氏〔1001～14頃〕松風「昔物語に、みこの住み給ひけるありさまなど語らせ給ふに、つくろはれたる水の音なひ、かごとがましう聞こゆ」

○はちがまし【恥】外聞が悪い。恥さらしだ。恥ずかしい。

*落窪〔10C後〕二「北の方、此度の御婿取のはちがましき事、宿世にやおはしけん」

○ひとがまし【人】相当の人物らしい。人にしられるほどである。

*栄花〔1028～92頃〕かがやく藤壺「世の中に少し人に知られ、人がましき名僧などは」

[動詞連用形+がまし]

○しれがまし【痴】おろかな様子である。ばかげている。ばからしい。

*落窪〔10C後〕一「ともかくも御心、さてつかひよしとはしもの給ひそ。いとしれがまし」

○はれがまし【晴】表だっている。公である。表だって派手である。

*夜の寝覚〔1045～68頃〕二「髪、かたちきよらにて、君にぐし奉りて、はれがましからんに」

○へだてがましい【隔】うちとけない様子である。心にへだてのある様子である。

*源氏〔1001～14頃〕若菜上「たはぶれにてもかやうにへだてがましき事なさかしがり聞えさせ給ひそ」

[副詞+がまし]

○わざとがまし【態】ことさらめいて大げさである。いかにも意識的な感じである。

*源氏〔1001～14頃〕梅枝「唐の本などの、いとわざとがましき、沈の箱に入れて」

最も成立の古い資料は『落窪物語』で、接尾語「がまし」は十世紀頃に使用が始まったと考えられる。また、同じ頃に成立した『大和物語』には「ことがまし」の使用が見える。

*大和〔947～957頃〕「いとことがましき物なりければ、かかる文通はしける気色ありと見て、はては文をだにえ通はさず、責めまもりつつ」（御巫本附載）

「ことがまし」は「口やかましい」の意で、「がまし」は形容詞「かまし」（囂）であるが、意味が形式化して、程度のはなはだしさを表す接尾語となったとも考えられる。

4. 接尾語「がまし」の意味特徴

『日本古典文学全集』（小学館・ジャッパンナレッジデータベース）から平安時代に現れた接尾語「がまし」を用いる語例を集め、その上接部分の品詞性によってまとめると、次の通りである。

[名詞+がまし]

をこがまし／盗人がまし／恥がまし／歌がまし／塵がまし／かごとがまし／猿楽がまし／事がまし／人がまし／懸想がまし

*「うちふくれて、いとをこがまし」と、少将つくづくとかいばみ臥したり。（落窪物語）

【現代語訳】「身体つきはぶくぶく超え（子）えていて、ひどく愚劣だ」と少将はつくづく、機長の隙間から覗き見している。

*盗人がましき童にて、くやつが「よくなさむ」とて、したるにこそあめれ。（落窪物語）

【現代語訳】盗人根性の女の童で、あいつが「落窪の君をよい身分にしよう」と思っていたことのようにだ。

*北の方、この度の御婿どりの恥がましきこと、宿世にやおはしけむ、いつしかといふやうに孕みたまへれば、心地よげに見えたまひし北の方も、思ひまつはれてなむおはすめる。（落窪物語）

【現代語訳】北の方がこのたびの四の君と面白の駒（こま）との結婚は、外聞の悪いことと思っていたらっしゃったのですが、前世の因縁があったのでございましょうか、いつの間にやらご懐妊なされたので、以前は得意げにみえていらっしゃった北の方も思案に連れていらっしゃるようです

*つゆとりわきたる方もなくて、さすがに歌がましう、われはと思へるさまに、最初によみ出ではべらむ、亡き人のためにもいとほしうはべる。（枕草子）

【現代語訳】少しもこれといった点もなくて、それでもいかにも歌らしく、自分こそはと思っているふうに、得意然として真っ先に詠み出したりいたしましては、亡き人のためにも気の毒でございませう

*はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳の中もかたはらさびしくもの悲しく思さる。（源氏物語）

【現代語訳】たわいのない話をお聞かせしてお慰め申し、泣いたり笑ったりして

お気を紛らわしてくれた侍従までが今はいなくなったのだから、夜も、塵の積る御帳の中の独り寝の寂しさに、ただ何かと悲しい思いでいらっしやる。

*昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかごとがましう聞こゆ。(源氏物語)

【現代語訳】昔の思い出話として、このお邸(やしき)に中務宮(なかつかさのみや)がお住まいになっておられたころの様子などを尼君に語らせていらっしやる、手入れの終わった遣水の音が、まるで訴えでもするかのように聞えてくる。

*かしがましうののしりをる顔どもも、夜に入りては、なかなか、いますこし掲焉なる灯影に、猿楽がましくわびしげ二人わろげなるなど、さまざまに、げにいとなべてならず、さま異なるわざなりけり。(源氏物語)

【現代語訳】やかましく大声を立てている博士たちの顔も、夜になっては、かえって昼よりも一段と明るい灯の光を受けて、道化じみていたり、みすぼらしげだったり、不体裁であったりなど、さまざまのいたらくで、なるほど常とは異なって、いかにも異様な有様なのであった。

*さがなく、事がましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに憚らることあれど、それにしも従ひはつまじきわざなれば、事の乱れ出で來ぬる後、我も人も憎げにあきたしや。(源氏物語)

【現代語訳】口やかましくて事を荒だてがちなのも、しばらくの間は何やらうるさく面倒なものですから、つい遠慮されるものですが、いつまでも言いなりになっているわけにもいかないことですから、何か一悶着でも起るとなると、こちらも相手もお互いに憎らしく、愛想も尽きるものです。

*ただ御祈りの事をのみぞいそがせたまへど、いさや、世の中にすこし人に知られ、人がましき名僧などは、このわたりに親しきさまなることはわづらはしきことに思ひて、召し遣はせたまへど、(下略) (栄花物語)

【現代語訳】ひたすら御祈祷のことばかりをお支度になるけれど、さて何としたことか、世間に多少とも人に知られ、一人前に名の通った僧などは、この一門と親密な様子を見せるのを厄介なことに思い、お呼び寄せに使者をお出しになるけれど、

*また、懸想がましくゆき戯れたる気色、はたゆめになく、大殿、内裏の御遊びなどよりはことなる夜離れなどもしたまはぬを、(下略) (とりかへばや物語)

【現代語訳】それに、女性に言い寄って遊び歩くといった気配はまた、まったくなく、関白邸か宮中での管絃の御遊びの折以外は、とくに外泊などもなさらないのだが、

[動詞連用形+がまし]

痴れがまし／歌よみがまし／すきがまし／ねぢけがまし／くつろぎがまし／罪得がまし／焦られがまし／あざれがまし／隔てがまし／胸つぶれがまし／晴れがまし／乱れがまし／見えきこえがまし／隔たりがまし／紛れがまし／かこちがまし／文書きがまし

*痴れがましうをかしうて、「やや、起きたまへ。聞こゆべきことありてなむ、

申してき」とのたまへば、足手あはせて、いとよくのびのびして、からうじて起き出で、手洗ひみたり。(落窪物語)

【現代語訳】ばかばかしくおかしい気がして、少将は、「おいおい、起きなさい。お話し申しあげなければならぬことがあって、あなたの父君に先ほどご挨拶申しました」とおっしゃると、少輔は手足を揃えてうんと気持よくのびをして、やっと起き上がって手を洗っていた。

*女の、すこしわれはと思ひたるは、歌よみがましくぞある。(枕草子)

【現代語訳】女で、少し自分こそはと思っている人は、歌詠みめいたふるまいをするものです。そうでないのこそつきあいやすい。

*右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処は、この君もいともうくして、すきがましきあだ人なり。(源氏物語)

【現代語訳】舅の右大臣が大事にしてお世話申しあげられる北の方のもとには、この中將の君もおっくうがって寄りつこうともせず、どうも色恋事に熱心な好き人である。

*今は、ただ、品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにもものまめやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける。(源氏物語)

【現代語訳】こうなつてはもう、身分のよしあしにもよりますまいし、顔かたちなどはなおさら論外でしょうし、どうにもお話にならぬひねくれ者という感じさえしないのでしたら、ただ一途に実直で、落ち着いたところのある女をこそ、生涯の伴侶と決めておくのがよいというものです。

*くつろぎがましく歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかしと思す。(源氏物語)

【現代語訳】のんびりと気楽そうに構えて、何かといえはすぐ歌語りを口にするではないか、女主人とて、やはり逢ってみればがっかりするのかもしれない、とお思いになる。

*いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦しと思す。(源氏物語)

【現代語訳】姫君はいかにもおかわいらしく、朝晩拝見している人でさえ、いつまでもお見あげしてたいくらいのご容姿なのだから、実の母君が今まで別れ別れのまま年月がたってしまったのも、君は、罪つくりなことと、おいたわしくお思いになる。

*兵部卿宮の、ほどなく焦られがましきわび言どもを書き集めたまへる御文を御覧じつけて、こまやかに笑ひたまふ。(源氏物語)

【現代語訳】兵部卿宮が、まだ間もないのに、あせり気味の訴え言をたくさん書いていらっしやる、そのお手紙をお見つけになって、大臣はにこやかにお笑いになる。

*すきずきしうあざれがましき今様の人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。(源氏物語)

【現代語訳】色めかしく浮つている当世の新し好きな女が不都合をしでかしたりなどするのは、何も男のほうの責任と限ったことではない。

*現の人にもあまりけ遠く、もの隔てがましきなど、気高きやうとても、人憎く心うつくしくはあらぬわざなり。(源氏物語)

【現代語訳】現に付き合っている人に対しても、あまりよそよそしくして、何か仕切りをおいているようなのも、それが上品な様子だといったところで、どうもこ憎らしくてかわいげのないやりかたです。

*心のうちはゆるびなく、胸つぶれがましき折々多かるに、さすがまた、さらばと心をかはいて、ひとつ心にならざらむかぎりは、せめて押しやぶり、心よりほかに乱さむとは思ひたらず。(浜松中納言物語)

【現代語訳】だから中納言の心の中は気の休まる時がなく、胸が締めつけられるような折々は多いが、そうは言ってもまた、それならばとしめし合わせて、姫君が自分に気を許してくれるようにならない限りは、無理に力づくで犯し、意向に逆らって乱暴しようとは思っていない。

*髪、かたちきよらにて、君に具したてまつりて晴れがましからむに、恥なく目やすきさましたり。(夜の寢覚)

【現代語訳】娘は、髪といい、器量といい、整っていて、姫君にお付きして晴れがましい場所に出たとしても、恥ずかしいところがないくらい感じのよい様子をしている。

*我さへかき絶えむも、さはいへど、乱れがましき心のままにやあらむ。(夜の寢覚)

【現代語訳】そうかといって、こちらまでまるで遠のくというのも、分別のないわがままということになろうか

*隔てなき心を知らせむとても、「これなむ御文」とてたてまつらむも、いと便なく見えきこえがましければ、いかにも、そのことはかけず、(下略)(夜の寢覚)

【現代語訳】いかに異心のない気持を知らせようと思うからといっても、「これが帝のお手紙です」といってさしあげるのも、人の目や耳に入った時、いかにも不都合なことに受け取られそうなので、その点には一言も触れず、

*あまたのこの世の契りながら、我は隔たりがましく、よそよそなる折がちなる、あやしかりける宿世なりや。(夜の寢覚)

【現代語訳】まさこと姫君と、二人まで子供をもうけたほどの深い契りなのに、私はとかくあの人に隔りがちで別々に分れている折が多いとは、自分でも訳のわからない宿世(すくせ)というほかはない。

*暁に召せと言ひしかば、心安くて、行ひも紛れがましし、人目もいかがななどの、のどかに思ひしも悔しう、いみじとも世の常なり。(狭衣物語)

【現代語訳】あの僧が暁にお召しになるようにと言ったので、安心して、勤行の妨げにもなりそうだ、傍目(はため)もどうかなどと、のんびり構えていたのが悔まれ、無念と言うのもありふれている。

*ほろほろとこぼし初めたまへる涙は、かこちがましういみじきに、御送りの

人々帰り参りぬれば、さりげなくて、眺め出だしたまへり。(狭衣物語)

【現代語訳】はらはらとこぼし始めなされた涙は、いかにも恨みがましくとめどもなく溢れ出ているところに、堀川の上をお見送りの女房たちが帰参したので、君は、素知らぬふりをして、外を眺めやっておられた。

*いとあさからずおぼつかかなげに思ひやりげにて静心なく、文書きがましくて、さらに我にも劣るまじげなるを、(下略)(とりかへばや物語)

【現代語訳】大将には、並々ならず心配そうに四の君を思って落ちつかず、早く手紙を書きたげな様子で、自分への愛情と比べても決して劣っていそうもなく見えるので、

〔副詞+がまし〕

わざとがまし

*また内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかしきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小桂も遣はず。(源氏物語)

【現代語訳】また、内密にも特別に贈物をなさって、それも細工の美しい櫛(くし)や扇(おうぎ)などをたくさん用意し、幣(ぬさ)なども特別にこしらえたと分るようにして、それに例の小桂(こうちき)もお遣わしになる。

収集できた平安時代の例文二〇一例の中で、「盗人がまし」はわずか一例、「痴れがまし」は三例というように使用が少ないのに対して、「恥がまし」は一一例、そして「をこがまし」は実に一二例にも上る。「をこがまし」は「ばかのようにみえる、愚劣だ」の意味で、自分自身のことについて、他人から「ばかばかしい」「なまいきだ」と思われそうだと意識する場合と、他人の行為、状態などについて批評する場合とがある。この点については、「恥がまし」も同じく他人からどう思われそうであるかという他者からの視線を意識する意味が強い。飛田・浅田(一九九一)は「～がましい」について、「第三者の視点を中心にすえた、日本文化に特徴的な語ということが出来る」と述べている。もちろん、「がまし」の意味は複雑で、「人の目を意識する」のはその意味特徴の一つに過ぎないとも言えるが、「かまし」(囁)が語源であるとすれば、他者の口、他者の見る目が甚だしく感じられるという点で共通していると考えられる。

現代語では、「がましい」は「はれがましい」「わざとがましい」のようによく評価に用いられ、情意より属性を表す場合が多い。しかし、平安時代において「がまし」はかなり主観的な表現であり、「胸つぶれがまし」「罪得がまし」のように、直接に主体の感情を表すことができる語である。辞書記述では、共通して「その状態や物に似ている」と解釈しているが、それぞれの語幹の性質を吟味して接尾語「がまし」の意味を分析する必要がある。

5. 接尾語「がまし」の語幹と意味

接尾語「がまし」は主に名詞と動詞連用形に付く。次に、平安時代の用例を中心に、接尾語「がまし」の語幹の性質と意味特徴を考察することにする。

まず、名詞に付く場合について考える。

①傾向の意……塵がまし／事がまし

塵が積っている御帳の状態を「塵がまし」で表現し、塵が多いという感じを伝える非常に直感的な表現である。「事がまし」は、事を荒だてがちという傾向を表し、「事ありげである、おおげさだ」の意である。

②類似の意……かごとがまし／猿樂がまし

「かごと」は、それにかこつけて言うことの意味で、例文では、自分も親王御在世の折のことを知っているのに、話の仲間に入れてくれないと文句をつける意を表す。「水の音なひかごとがましう聞こゆ」は擬人法である。ほかに、「影見ても憂きわが涙落ちそひてかごとがましき滝の音かな」（紫式部集）など、「かごとがまし」は多く擬人法として用いられる。

「猿樂」は、当時の滑稽な物まねを主とする演芸で、「猿樂がまし」は「こっけいな言動をする、おかしなかつこうをする」という意である。

③性質の意……盗人がまし／歌がまし／人がまし

その物の性質を持っている、あるいは、その物としての必要な条件を備えている意を表す。「盗人がましき童」は、盗人の性質を持っている、盗人根性の女の童の意である。「歌がましう」と「人がましき名僧」は、「いかにも歌らしく、自分こそはと思っているふうに、得意然として真っ先に詠み出したりする」ようす、「一人前に名の通った」僧侶というように用いられ、「立派な、完成した、とりたてて言うに値する」という意味合いが含まれる。

④感情の意……をこがまし／恥がまし

「恥がまし」は、外聞が悪いの意を表し、自分以外の人の感情表現に用いるほかに、一般的に「恥ずかしい」という感情を引き起こせる事柄や、自分自身の感情の表現にも用いられる。ただし、心の動きを表す「恥ずかしい」と比べて、「恥がまし」は自分自身のことについても、他人からどう思われそうであるかという意識が強い。この点で、前述したように「をこがまし」も同じである。

*後にもなほ、「人に恥ぢがましき事言ひつけたり」とうらみて、（下略）（枕草子）

【現代語訳】 そのあとでもやはり、「人に恥になるようなことを、事実を曲げてこじつけて言った」と恨んで、

*あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、ひき入り沈み入りたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」（源氏物語）

【現代語訳】 「並はずれて昔気質(かたぎ)の人なのです。ああした遠慮深い人は、おとなしく引っ込んでいるのがよいのです。さすがにこのわたしまでが恥さらしというものだ。

⑤言動の意……懸想がまし

「懸想」は「思いをかけること、恋すること」という意を表し、動作性を有する名詞である。「懸想がまし」は恋しているようすを表す。

次に、動詞連用形に付く場合について考える。

- ①傾向の意……隔たりがまし／見え聞こえがまし／紛れがまし
- ②類似の意……隔てがまし／胸つぶれがまし
- ③性質の意……歌よみがまし／すきがまし／ねぢけがまし／あざれがまし／乱れがまし／晴れがまし
- ④感情の意……痴れがまし／罪得がまし／焦られがまし／かこちがまし
- ⑤言動の意……くつろきがまし／文書きがまし

この分類は、厳密なものとは言い難いが、これによって、ある程度「がまし」の意味特徴が理解しやすくなると思われる。発話者個人の主観性を加えるのは「がまし」の意味特徴の一つで、具体的には傾向・類似・性質・感情・言動の五つの方面に現れる。しかし、接尾語「がまし」を有する形容詞の使用は『日本古典文学全集』（小学館・ジャッパンナレッジデータベース）における平安時代の文献から集めた例文二〇一例のうち、「盗人」「歌」「塵」「猿楽」「事」「人」「懸想」「歌よみ」「くつろぎ」「焦られ」「胸つぶれ」「乱れ」「見え聞こえ」「隔たり」「紛れ」「かこち」「文書き」「晴れ」に上接する語は一例のみである。また、「あざれ」「隔て」は二例、「痴れ」は三例にすぎない。このことから、発話者は、自分にとって身近な具体的名詞や動詞を用いつつ、真新しい表現を好んで使ったというように考えられる。それ以外の、用例数が比較的多い形容詞は以下の通りである。

恥がまし（一一例） かごとがまし（一〇例） すきがまし（九例） ねぢけがまし（九例） 罪得がまし（一二例） わざとがまし（一三例） をこがまし（一二例）

平安時代における接尾語「がまし」は発話者の主観的な心理状態を表す場合に用いられるようである。

*はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳の中もかたはらさびしくもの悲しく思さる。（源氏物語）

ここでは、「塵の積る」とは言わず、「塵がましき」という語を用いたのは、その後続く独り寝の寂しさをいう「かたはらさびしくもの悲しく思さる」とともに、発話者の主観的な感想を表す。また、前文では、「塵は積もれど、紛るることなきうるはしき御住まひ」と書かれていて、その時より状況が進んだこと、独り寝の寂しさに悲しく思っているという心境の変化が「塵がまし」によって表現されていると解される。

「がまし」の意味は傾向・類似・性質・感情・言動など、様々な方面から解釈できるが、発話者個人の主観性を中心にした表現であるのに変わりがない。これは接尾語「がまし」の根本的な意味特徴であると思われる。また、『日本国語大辞典』（二〇

〇一)の「語誌」に述べられているように、中古には「はれがまし」「ひとがまし」のように、肯定的な意味を表す語もあり、否定的な評価の意味に偏るものではなかった。この点も含めて、時代が下って、接尾語「がまし」の語幹と意味特徴には、変化が見られる。

6. 接尾語「がまし」の派生語

接尾語「がまし」は平安時代に現れ、鎌倉時代と室町時代においても優れた生産力を発揮する。次には鎌倉時代以降の接尾語「がまし」の派生語を示す。

[鎌倉時代に現れる派生語]

- ①名詞+がまし 口がまし 才覚がまし 物がまし 夢がまし 様がまし 余所がましい
- ②動詞連用形+がまし 限がまし
- ③形容動詞語幹+がまし すすろがまし

[室町時代に現れる派生語]

- ①名詞+がまし
愛敬がまし 汗がまし 意見がまし いたかがまし 嘘がまし 大人がまし
思出がまし 角がまし 狐がまし 隔心がまし 故実がまし 骨がまし 事がまし 細工がまし 造作がまし 沙汰がまし 俗がまし 手がまし 外様がまし 殿がましい 情がまし 秘事がまし 分別がまし 骨がまし 実がまし 目垂がまし 女郎がまし 面目がまし 油断がましい
- ②動詞連用形+がまし
恐がまし 懸がまし 差出がまし ねだりがまし
- ③その他の語基+がまし
幼がまし 哀がまし あしあらがまし

調査した範囲では、鎌倉時代以降も接尾語「がまし」の語幹に名詞が多用されており、平安時代と比べて、抽象名詞や漢語も多く用いられるようになっている。「幼がまし」「すすろがまし」のような形容詞語幹や形容動詞語幹に付くものも現れる一方、室町時代末までは、否定的評価に偏るという傾向はまだ見られない。

7. おわりに

平安時代に現れた「がまし」などの主観的意味を表す接尾語によって、上代語形容詞の「ク活用」と「シク活用」における整然たる語基の情意性に対する要求から解放され、更なる多様な語基がシク活用形容詞の語幹に現れることが可能となった。シク活用形容詞接尾語の発展は中古中世形容詞の造語に豊かな変化をもたらしていた。

中古中世において、シク活用形容詞接尾語が優れた造語力を発揮し、合成形容詞は著しく発展した。情意的意味を表す語基が減少し、その他の多様な語基の発展、合成

形容詞の大量出現という事態に伴って、上代におけるク活用形容詞とシク活用形容詞の秩序ある対立関係の緊張は次第に緩んできた。中世以降、合成形容詞がさらに発展し、「がまし」などの接尾語の意味特徴にも新たな変化が見られた。

【参考文献】

- 『時代別国語大辞典室町時代編』（1985～2000年）三省堂
『日本国語大辞典』（第二版）（2000～2001年）小学館
阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店 第六版
柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京堂
釘貫亨（1996）『古代日本語の形態変化』和泉書院
川端善明（1997）『活用の研究Ⅱ』清文堂
斉藤倫明（2004）『語彙論的語構成論』ひつじ研究叢書（言語編）第30巻 ひつじ書房
村田菜穂子（2005）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院
村田菜穂子（2002）「古代語形容詞の造語形式—中古散文の形容詞を中心に—」『帝塚山学院大学日本文学研究』（第33号）
山本俊英（1955）「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23号
沖森卓也（1985）「形容詞の成立」『日本語学』（4・3）
松浦照子（1985）「複合形容詞の形成と継承—平安時代散文作品における—」『国語語彙史の研究六』和泉書院
勝田耕起（1998）「接尾辞ガマシの意味とその変化」『文藝研究』（第145集）
于艶麗（2012）「室町時代におけるシク活用形容詞に関する考察—合成形容詞の語構成を中心に—」『立教大学大学院日本文学論叢』（第12号）
于艶麗（2019）「上代語シク活用形容詞語幹の性質について」『立教大学日本文学』（121号）
于艶麗（2020）「『日葡辞書』に見る古代語形容詞語構成の変化」『立教大学日本語研究』（第26号）
于艶麗（2021）「中古中世新出シク活用形容詞の語構成」『立教大学日本語研究』（第27号）
日本国語大辞典 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）
日本古典文学全集 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）